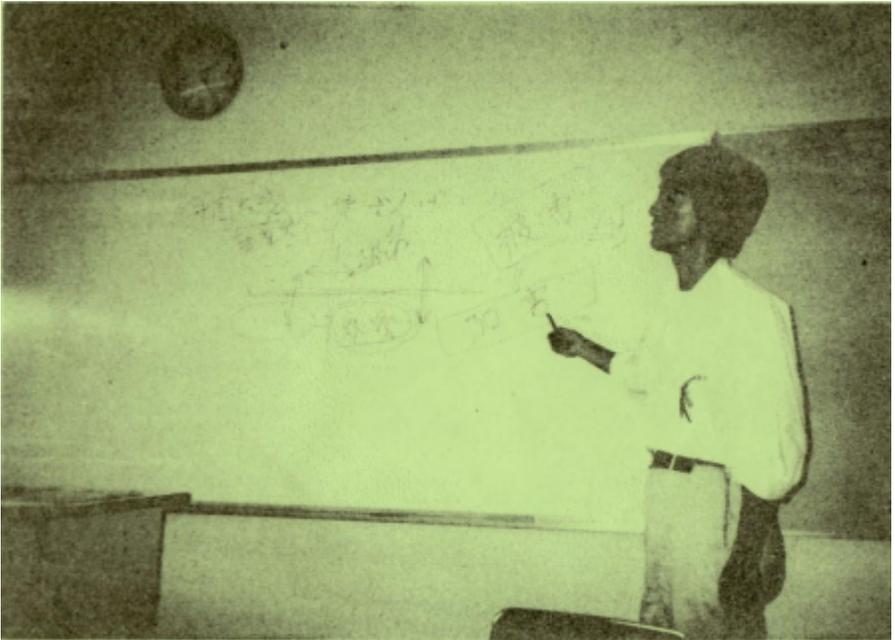


2003秋の学習会

「中国国民党と共産党の捕虜・戦犯政策」について



撫順の奇蹟を受け継ぐ会 関西支部

反戦平和と日中友好のために

## はじめに

撫順の奇蹟を受け継ぐ会関西支部（略称 受け継ぐ会関西）は、2001年、21世紀の幕開けとともに歩み始めました。「中国帰還者連絡会」（略称 中帰連）の事業と精神を受け継ぎ、反戦平和と日中友好のために活動をすすめており、『前事不忘 後事之師（前の経験を忘れず、後の教訓とする）』の考え方から、歴史の事実・真実を学ぼうと、「学習会」をおこなっています。

21世紀は、地球上のすべての人々が、「平和な世紀」を望み、そのための活動や取り組み、平和へのうねりが高まりつつあるとき、いま、2004年春において、イラクをはじめとする数多くの地域で、侵略行為や紛争が絶えません。

このような時代に、受け継ぐ会関西では、「学習会」などで明らかにされたことを少しでも多くの方に伝え、お互いの理解を深めるために、小冊子「うけつぐ かんさい らいぶらりいー」を発刊することにしました。

今回は、2003年秋の学習会「“中国国民党と共産党の捕虜・戦犯政策”について」をまとめてみました。この小冊子を通して中国における捕虜・戦犯政策を学ぶきっかけになれば幸いです。

## 目 次

- 1 . 学習会 概要 . . . . . 3
- 2 . 講演録 . . . . . 4
- 3 . 講演後のディスカッション . . . . . 16
- 4 . 感想 . . . . . 30
- 5 . 参考資料 . . . . . 34
  - < 国民党、共産党、日本関係の年表 >
  - < 地図 >

## 1. 学習会 概要

テーマ 「中国国民党と共産党の捕虜・戦犯政策」について  
～ 蒋介石 = 国民党政権の対日政策と「遺骨送還運動」 ～  
日時 2003年11月1日(土)午後  
場所 大阪市 弁天町市民学習センター  
講師 墨面(モーメン)さん(在日中国人・受け継ぐ会関西会員)

この学習会のきっかけは、2003年6月28日に神戸でおこなった、山口光夫さん(元中帰連会員)のメッセージを伝える集会のディスカッションの中で、国民党の捕虜・戦犯政策が寛大であった旨の発言があり、いわゆる蒋介石の“暴力を以って敵の暴力に報いるな”との告示について、その真相が何であったのか?、事実を明らかにしたいということで学習会を開催しました。

講演後、参加者で、ディスカッションをおこないました。参加者の中には蒋介石・国民党の戦中・戦後の政策を今まで誤解していたことを認識されたり、中国侵略戦争をどうとらえるのか、戦後の賠償のこと、「靖国」の問題、いわゆる「草の根右翼」の論調に惑わされないこと、戦後の日本での平和運動への問題提起、「日本国憲法」の意義など意見が交わされました。参加されていた元中帰連会員は、「お互いが手を取りあって、憎まない、けなさない、ひとりひとり違っていてもそのことを尊重すること」が重要である、と語ってくださいました。ディスカッションが白熱し、また、司会の進行が不慣れなところもあり、意見がかみ合わない場面もありましたが、会員相互で自由に意見交換ができた点で、一定以上の意義はあったと思われます。

## 2 . 講演録

### 講師の自己紹介

南京とか強制連行とかで 日中間の戦後補償問題を中心とした問題に関わっている。その中でも台湾問題に最も関心がありました。撫順の戦犯問題に対しては全くの素人。

### 講演の本論

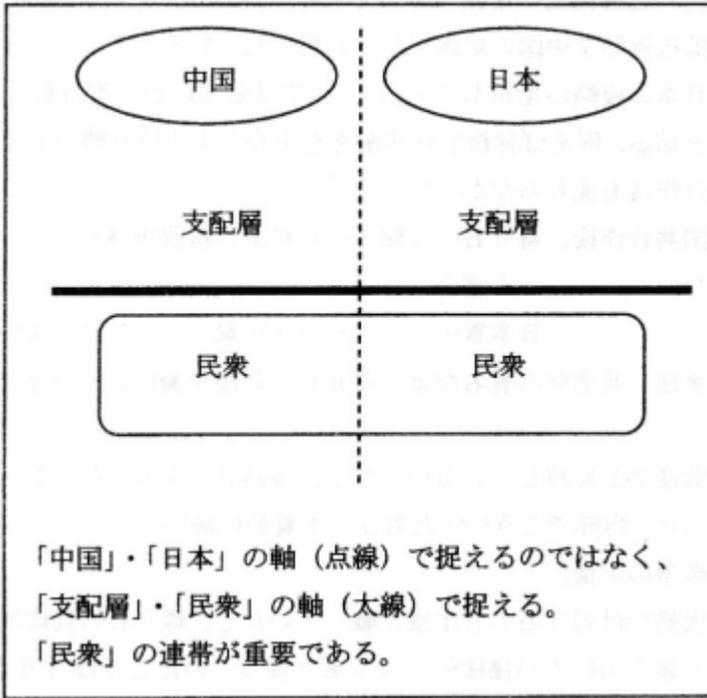
今日論じるのは、平和運動、一般的な人の考え方のネックになっていること。侵略戦争に関わる問題を、日本と中国との対立項として考える側面が強い。日本は侵略行為をしました、中国はこういうことをしました。こういった見方では、中国共産党のいわゆる「寛大政策」の本質が見えてこないだろう。

中国にも支配層と民衆があり、同じく日本にも支配層と民衆がある。こういう極当り前のことをこう（縦割りに）してきた。日本はこうでしょう、中国ではこうでしょうと。これを極当り前のこう（横割りに）することが私の発想です。

中国の政治的な支配層が蒋介石の国民党、民衆の政治勢力として共産党があった。国民党政策を論じるうえで、日本対中国の観点からの従来の対立軸では本質が見えてこなかった。（国同士の対立関係）

新しい観点は中国国内の支配者、民衆の関係 = 国民党と共産党の関係というのが基本的発想。（民衆同士の連帯関係）

<イメージ図>



国民党の捕虜政策として「以德報怨」が語り伝えられていたが、これは間違いである。中国の「寛大政策」をこれと勘違いされることが多い。インターネット上ではほとんどこれである。

右翼の本流である岸信介などいわゆる台湾ロビー（新中国に敵対する中心勢力）が蒋介石の「恩義」に報いるということで台湾政権を全面的に支持していく。台湾政権を支持することは、中国の解放闘争に敵対することに他ならない。

国民党・蒋介石の「以德報怨」と中国の「寛大政策」とはどこが違うかを明かにしていくべきでしょう。

## 中国の近現代史の常識

抵抗運動を中国の総体がしたと思われるが（国共合作後、協同して日本の侵略に抵抗したと）、一面では正しいが、実は蒋介石は日本の軍と結ぶ、例えば背後から共産党を中心とする抗日勢力を攻撃する。国共合作後も変わらなかった。

国共合作後、蒋介石 攻撃 八路軍と新四軍（\*）

| 連合 |

日本軍 攻撃 これが実情

（\*註 共産党の有名な軍：蒋介石に背後を衝かれほぼ全滅している）

共産党が対峙しているのが日本の侵略者であり、その背後は蒋介石であった。内部でこういった対立が本質的に続いていた、これが当時の抗日戦争の実像。

大筋では蒋介石も日本軍と戦っていたし、蒋介石の具体的な軍人、民族主義の強い人が積極的に日本軍と戦っていたことは言うまでもない。

## 日本敗戦時の実態はどうであったか（国民党の政策）

中国奥地の重慶政府は国共内戦を目前に控えていたが、最前線は日本軍と共産党が対峙していた。

高性能の日本軍の武器がどっちに渡るかが非常に大きな問題であった。

- ・ 蒋介石（国民党）は、日本軍に現地で止まること、敗戦により日本軍が現地で動揺して共産党軍に武器を渡さないことを戦犯容疑のトップである岡村寧次に命令した。
- ・ 共産党に武器を渡さないばかりか、日本軍に戦闘再開を許可し、そのために敗戦後の日本軍の戦死傷者は2万人を越えた。
- ・ その交換条件として、戦犯名簿から外し、将校の現地における特権

を認めた。

台湾と「白団（パイダン）」

- ・ 蒋介石は内戦に敗れ、台湾に入る。
- ・ 岡村寧次を戦犯の名簿から外して、民衆の反発を避けるために秘密裏に帰国させた。

戦犯裁判

- ・ 蒋介石は寛大ではなく、国民党裁判でB C級戦犯（実行犯）149人を処刑する。
- ・ なおかつ軍のトップは放免し、寛大であった。階級による分断を実行。（共産党は、逆をした。戦犯トップは逃げていたが、民衆部分には寛大政策をとった）

## アメリカの対国民党政策

- ・ 国共内戦時には蒋介石を支持し、膨大な軍事援助をするが、内戦の過程で国民党軍・国民党の腐敗振りを見て「中国白書」により国民党支援を打ち切る。
- ・ 国民党は台湾に逃れた時には、政権としては成立ちようがなかった。

## 蒋介石の軍制

- ・ 蒋介石は台湾の軍隊をアメリカ式より日本式（精神主義・経済的：徴兵制）に転換する。
- ・ 日本式導入に際して、岡村寧次に話を持ちかける。
- ・ 岡村の命を受けて旧参謀長富田直売ら83名の旧日本軍幹部が秘密裏に台湾に渡る。富田の中国名、白鴻亮から「白団」と呼ばれる。（覆面部隊）

- ・ 83名の内、2人を除いて全て中国戦線で直接作戦に関わった将校達の非常に大きな軍事顧問団であった。
- ・ 当時、まだアメリカの軍事顧問団がいたが、彼らにも伝えられなかった。
- ・ 岡村寧次は日本にあって、支援組織、「富士倶楽部」を造った。軍事資料、作戦図を収集して白団に送る。
- ・ 当時、まだ中国にいた235万人の日本軍民を帰国させる（日本側責任者：岡村寧次）には47年かかるだろうと言われていたが、中国民衆の民生を犠牲にしてまで蒋介石が強行して、10ヶ月で帰国させた。=台湾ロビーはここに恩義を感じている。

### **白団の具体的仕事**

- ・ 台湾軍の教育を一手にやる。
- ・ 元々蒋介石・国民党軍は、台湾に逃げる前は、日本の軍学校出身者ばかりだったように日本との繋がりが非常に強かった。

### **白団の精神教育（日本精神・武士道）**

- ・ 今日、「台湾の民衆や社会はもともと親日的」であったが、国民党は反日教育をしたとされるが、これはまったくのデマで、もともと国民党自体が親日的。
- ・ 現在台湾の軍を掌握しているトップは、ほとんど全て白団に教育された生徒達。（民族主義の強い白団反対の孫立人、陳誠は50年代の白色テロで肅正され白団一色となる。）
- ・ 「富士倶楽部」の収集品 - 1953年から約10年間で軍事図書7,000、資料5,000を台湾の白団に送り、それに基づいて軍人教育を行う。

## 実戦指揮

- ・金門島上陸作戦を指揮したのも日本軍将校であり、中共軍3万を全滅させる。
- ・最近の研究では、汪精衛政権でさえ国民党・蒋介石の意思で動かしていたといわれる。(任務を分担した。国民党は国民の手前、抗日。部下の汪精衛には日本と和解。)
- ・富田も戦時中、重慶に飛び連絡をとり、裏で蒋介石とは繋がりを持っていた。

横割の具体例として白団を挙げた。

白団は1949年から始まり、1969年2月1日の東京で解散式をする。

これらの事実は以後、秘密にされたが4～5年前に台湾のジャーナリストによって調べられ、NHKでも放送された。日本軍の将校連中は誇りに思っているような表現だが、中国民衆から言うと、台湾の統一事業に敵対行為となる。

## 日本国内の動き = 遺骨送還運動

戦時中、4万人強の中国人強制連行の内、7千人近くの死亡者がでる。遺骨もその場にほったらかしとなる。

## 花岡事件

(秋田県大館市、当時花岡町で、鹿島建設が河川改修工事で中国人約千人を強制連行する)過酷な労働と、後の蜂起で約半数が死亡する(餓死・暴行により)。一斉蜂起、実際には餓死寸前の逃亡状況だった。ほとんど抵抗できないまま全員捕まり、三日三晩の拷問で更に百人が殺される。この時の遺骨が放置される。敗戦時、米軍により発表。

日本人労組関係者、朝耕人が遺骨発掘運動を展開。

秋田県を皮切りに日本全国に広がる

1953年の冷戦構造時代中帰連も加わる

平和運動としての国民的動きに広がる ～～大きな流れ～～

当時の平和運動は中国との関係を抜きには考えられなかった。

花岡から東京で慰霊祭をするために日本人・朝鮮人・華僑総会が中心となり遺骨を送還する。

- ・公安委員会が東京都の条例を楯に妨害する。  
( 占領政策を批判してはならない、集団行進をしてはならない、公言演説をしてはならない、警察官の制止にはしたがうこと )
- ・ 中華民国駐日代表団 ( 蒋介石政権 ) が命令書を出す。  
( 公安委員会の規制以上の命令 )  
( 華僑総会を主催者団体に入れてはならない、団体代表の名前を言っ  
てはならない、報告・演説・ビラ配布・写真の展示は禁止、追悼文の朗読禁止 )
- ・ 1950年11月1日浅草本願寺で約2,000人が参加して慰霊祭を実施  
( 会場地下には完全武装の警官400人が待機、近くの小学校にも300人の武装警官が待機 )  
花岡・生存者を紹介しようとしたところ、中華民国駐日代表団( 蒋介石政権 ) が演説を遮る。
- ・ 当時の日本の国家権力と国民党政権が一体となって、当時の日本の平和運動に対して阻止する動き、これが白団と同じ構図である。

以上の一連の動きも縦割りの見方では理解できない、横割りで非常に簡単に理解できる。

## まとめ

一億総懺悔 (今までの) 平和運動にも近い発想がある。

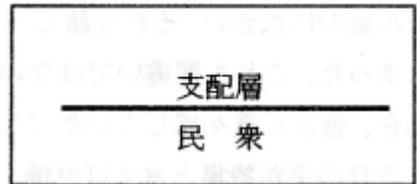
侵略戦争を始めたのは支配層だが、日本民衆もまたそれに抗することなく、中国で虐殺行為をしたり、日本でも在日の人を虐殺したのは民衆の一人一人がやったのではないか。だから日本の民衆の一人一人が反省しなければならない、と言う意見。これも正しく、決して間違いではない。

最初の中国国民党の捕虜政策と、共産党の捕虜政策の違いの結論。

### 中国 (共産党) 政策

「侵略戦争で悪いのは、一部の支配層であり、日本の民衆には罪はありません。」

< 4 ページのイメージ図参照 >



これに日本の民衆も応えることができなかった。平和運動をしている人も同様。いわゆる平和運動をやっている皆さんも、中国民衆の深い政治的、哲学的真意を理解できず、こうした中国の言い方は「楽観的過ぎる」「政治的方針、発言」と切り捨てる面が多々あった。

中国 (共産党) の捕虜政策の中で、これを徹底的にやった。日本の兵士が実際どうして戦争に狩り出されたか徹底的に教育した。だから日本の民衆にも横に割って欲しい。(横の対立を止めて、縦の対立にしよう) としたのが寛大政策。

いわゆる戦争責任を曖昧にする、曖昧にするどころか利用する国民党の「暴をもって暴に報いるな」と全く違う思想と思います。日本の市民運動・平和運動の中で中国民衆の「横に割ろうぜ」という思いを充分には理解してこなかったのではないだろうか、民衆同士が手を繋ぐ概念が

弱かった。

今後、横割の発想をしないといけない。

日本の民衆、当時は戦争に参加し侵略の数々の残虐行為を行ったのは何故なのか、そういった人達は どうやって変わっていくのか、を日本の平和運動の中では考えられてこなかった。

日本の戦後の平和運動の中であるのは、どういう訳か被害に基づく平和運動であった。例えば「原爆を落とされました」とか「抑留されました」とか、被害を語ることによって平和運動が行われた。特に原爆がそうであった。その弊害はすでに明らかになっている。

最近「加害」というのに目がいった。日本軍を語る場合には加害の方が遥かに大きい。それを語るべきというのが平和運動の主流になってしまった。これも間違いではないが。被害、被害と言われていた平和運動を、皆さん重々感じていたでしょう、日本の平和運動と言えば、8月15日の平和特集と言えば原爆、とんでもない！加害の方が遥かに大きい！これも確かに正しいが、私達はこの中でとんでもない過ちをやっている。

それはこの中で「被害」と「加害」を対立させてしまった。つまり加害というのは認識することはできない、これはいわゆる想像力である。俗に言う。殺した人はどうなるんや、あの家族はどうなるんや。被害は直接である。自分が食えなかった、お腹が減ったと、その意識の方が遥かに強い。

そんな中で、「あなたの被害はどこからきたのか」あなたがこう言う（見方）をすれば、「あなたの被害はこっちに向くはず」、にもかかわらず、それが無いが故にこっちにむいちゃう。（上：支配者ではなく、横：相手国を敵視する）

それが何かというと、今のいわゆる「草の根右翼」と言われている。草の根右翼という思想がそういうのである。

例えば、実際に戦争に参加した人達、特に中帰達のように中国で実践を踏んできたそれなりの人はそれほど大きな問題でなくても、その他圧倒的な兵隊もしくは日本の民衆、当時戦争下で食べ物も大してなかったよと、非常に苦労しましたよと、いう人に対して「加害！加害！おまえも加害したんや！」というので納得できるはずがない。そういう不満を今、石原慎太郎とか小林よしのりとかで吸収されている。そやないでと、あいつらに対立構造を造ってしまった。

漠然とではあるが、今後の平和運動、市民運動を含めて「加害」と「被害」を対立ではなく、被害の根源と加害の根源を結ぶことによって横の線を作っていく。そういう平和運動をやっていくべきではないかと思う。

- ・横割が「寛大政策」
- ・日本の平和運動は、被害がクローズアップされる弊害がある。

加害を語ることが次のステップとなったが、大きな過ちである。被害と加害の対立が「草の根右翼」を生んだ。

被害 = 実際の痛み

加害 = 想像力                      対立ではなく、両方の根源を探る事が大事。

これを大いに感じたのは、山西省の中国の女性が性被害、日本軍から性暴行を受けた、この山西省に参加（参戦）していた日本軍兵士の講演を聴きにいった時に非常に感じた。沖縄戦の被害体験もあり、両方（被害と加害）を経験した近藤一さんは、山西省のダーニヤンに会い、被害と加害が一つに繋がった。敵は誰か、味方は誰かが初めて分かった。

その人が言いました。「今の社会的な雰囲気の中で、山西省での加害ばかり言われると、納得できない」と。あの人の体験の中には沖縄もある。沖縄でも住民を壕から追い出して、住民を虐殺したと、それも言われる。しかし私はそんなことをした憶えもないし、それは絶対にありえないと、しかし勿論彼個人の体験であり、それ以外にはなんぼでもある。彼の意識はそこからは絶対変わらない、当然のことながら。自分の生死をさ迷ったあの人の体験があるわけだから。それを崩すのが何かと言えば、その人のなんらかのきっかけに山西省に行って、被害にあったおばあちゃんらに初めて会う。そこで、初めてあの人は自分の加害というものに気がつく。沖縄でコテンパンにやられたことを、私が中国におった時はこれをさんざんやってきたんや、と言うのであの人の中で被害と加害が繋がる。

こうして人間というのが変わっていくのだ。それは中国の寛大政策、と言うか捕虜政策と通じるものがあると。私達の運動は正に民衆と、もちろん加害の側にいたかも知れないが、そういった民衆を変えることによって、あなたがたの敵は誰なんだ、と。友は誰なんだ、と言う教育を、口で言う教育ではなくて、運動の中で実践を積んで平和運動がある。でないと今現実にはそうであるが、対立軸を作ると、どう見ても草の根右翼が支配する社会に今正になっている。

「被害」は実感だが「加害」は想像である。これは当たり前である。

だから、日本の、言うて見れば戦争で言うと、加害国の平和運動の平和意識はその程度なんだと言われればその程度である。それしかない。そこから出発するしかない。中国民衆と日本の民衆の平和意識を一致させようなんてことはありえない。中国民衆の親戚の誰かが、絶対日本人に殺されている、という人間と、単にああ、そんなことがあったんですか、という人間の意識が一緒になるうはずがない。

ならせる必要もない。それぞれの立場、それぞれの位置で平和運動をやるべきだ。そうした位置で中国の民衆と繋がっている、そういうことが必要だと、いう風に結論に達した。終わります。

### 3 . 講演後のディスカッション

\* ディスカッション部分には、一部、会の主旨とは異なる発言等もありましたが、参加いただいた皆さんのすべての発言を収録させていただきました。

\* 講師の墨面さんには、講演内容の補足も含めて発言していただきましたので、お名前を明記しました。それ以外の方は、発言順にアルファベットで表記しました。

#### 【Aさん】

(経歴) 中国戦線で新四軍と対峙。敗戦後八踏軍の捕虜となる。八路軍の捕虜のあと、民間人の引揚げを手伝う。

(経験) 桃源郷と呼ばれる所で新兵幹部候補生一個小隊が本隊と分かれた後、消滅した。その後、国慶節に捕虜1名を返してくれた(3ヶ月の新兵で新四軍の捕虜となっていたが、向こうでは大事にしてくれたと言う)。

しかし、中隊長は士気に関わると銃殺にした 中国人に助けられたのに日本人に殺された。そのことが許されないばかりか、今も同じことが繰り返され、しかも我々も協力している。

(希望) この会が、我々が加害者でもなく被害者ともならないようにはどうすればいいのかを考えるための第一歩でなければならないと思う。

#### 【Bさん】

(経歴) 学徒動員で、いきなり洛陽から龍門までの間の最前線で現地教育を受けた。私達は一兵卒なので正面の敵が誰かを知らされずに戦っていたが、今話を聞いて八路軍だと知った。蒋介石が国民党だと言うことも今になって初めて分かった。

保定の砲兵学校入隊前に敗戦を向かえるが、それを知らず(味方の)伝令が来る9月までパー口(八路軍)と戦う。それから一年半捕虜生活

を送る。武器をパー口に渡さず、蒋介石軍に渡すことは実行された。私は山砲(隊)だったので、山砲の砲と、一銭五厘の兵隊より高くつくと言われていた馬は、全部、中国の兵隊に渡す。その時に、手塩にかけて、我々が食事をするまでに世話をしなければならぬ人間の生活は それからだと教えられてきた。八踏軍ではなく蒋介石軍にその武器弾薬、馬、一番別れが辛かったのが馬、それを渡した。その時、10人の兵隊が向こうに行き、説明をしてあげなければ分からないので行った。向こうはこっちの一兵卒より将校が頼りないので10人が説明をしに行った。向こうの本営で、10人を帰さず、部下を百人つけるから教育してくれと頼まれた。日本の軍人の偉大さは分かっているのだ。

私は、一遍日本に帰って家族の消息を知りたいので帰らせてくれと言ったが、あとの4~5人は帰っても身内もおらないだろうと残留した。私は一日十里の道を10日間かかって無事に、上海から米軍のLSTで博多を經由して兵庫県に帰ってきた。幸いに家があったのでそのまま中国に行く気はなかった。もし家がなかったら中国に帰ると約束していた。(経験)中国の部落は城壁に囲まれていて、城壁から一歩出るとなにもない。日本兵が突入するには城門を破らないといけない。山砲隊が山の上から砲撃を加え城門を破り、歩兵が突入した。山砲一門に護衛のために10人の小銃を持った兵隊がついていた。それが突入した。その時に本当に悪いことをしている。どこに金があるとか全部知っている。甕(カメ)を叩けば底から金が出てくるとか。しかし、それを背囊一杯持って帰っても、他所の部落に行けば使い物にならなかった。その部落しか使えなかった。

私がなぜ第一線に出ることを望んだかということ、幹部候補生は直に上になって我々(古年兵)を虐めるから逆に今虐めてやろうと初年兵教育では虐められた。何回も討伐に出されたが、討伐中は楽しい。討伐中は上官が初年兵を恐がる。なぜだと思いませんか?本営では虐めて虐めてサデ

イスト的に初年兵を虐めることを趣味にしている者でも 討伐中は下の者を可愛がる。そんな3～4年兵の中の幹部候補生だから散々虐められたが。そういうことは別として。

70歳代の方は駄目(戦争を知らない)、80以上も85～86の方は(階級が)上になっているから軍隊の苦しみを忘れて、79、80、81の三代くらいが一番苦労し戦争というものの残虐さを知って帰ってきた。

(質問) 残留した兵隊がどうなったかを知りたい。中国で奥さんをお願い子どもがいる日本人がいるはず。

蒋介石が、日本の分断を阻止したのは事実か？

日本の軍人は一兵卒でも優秀だと残留1人で百名の教育を依頼された。白団と関係はないのか？

靖国神社問題で、中国が問題ありとする本当の根拠は何か？常識的な回答ではなく。日本が負けたとは言え、同問題が内政干渉と言えないのは何故か？

### 【墨面さんの応え】

「戦争認識」～侵略戦争をどう見るかを中国や韓国が危惧する。

A級戦犯を合祀、軍人恩給の階級による金額の違い(差) = 侵略戦争を肯定した思想である。

日中友好条約で(中国が)戦後賠償を放棄したのは、(日本が)侵略戦争だと認めた結果。条文にはないが。

前提 侵略戦争を真摯に反省する(日本は新生した)

経済援助ODAが賠償的性格とみられるが、問題外である。

A級戦犯を祀るか祀らないかは内政問題だが、内政(国内)が侵略の芽になるなら、内政ではすまされない問題となる。

【Cさん】

8月15日を諸外国へのお詫びの日と出来ないのは何故か？

(Bさんの質問を受けて)田中角栄は、中国で日清戦争から50年間迷惑かけましたと頭を下げたが、日本のマスコミは国内向けには15年戦争と値切ってしまった。満州事変にしる支那事変にしる宣戦布告していない。中国に対しては宣戦布告していない。

日清・日露の前から靖国に一番最初に祀ってあるのは長州征伐で徳川幕府、勅命を受けた官軍に長州の賊軍に対して戦って、戦死した賊軍の戦死者が第一号として祀ってあるのが靖国神社である。ところが、天皇の為に戦ったのは、徳川軍であるのに賊軍であったのが第一号となっている。それから次に戊辰戦争で戦死した者、西南戦争で戦死した者、次に日清戦争で戦死した者。先ほどの捕虜にされて帰ってきたからと銃殺された若い兵隊も、銃殺にしたということで靖国神社に祀られているのではなく、名誉の戦死ということで祀ってある。

そんなものに対して、ポツダム宣言を受け入れた日本が、何故戦死者の慰霊ということで国としてしないといけないのか。本当に国として間違った政策のために若い命を奪ったと、殺してしまったと、申し訳無かったというのなら、それぞれの仏壇になり、そこに行って頭を下げるのが当たり前。(Bさん:「もっともや」)明治以来、富国強兵の中で、天皇のために死ぬことが忠義なのだと言って 殺した人間を祀っておくことを、依然、戦後ポツダム宣言を受けてからでも、ずっと靖国神社と言うことで称えることが侵略戦争を是認する以外にはないわけである。これは中国や朝鮮が文句を言う、言わない以前の問題として、自分の肉親を奪われた。私の親父も一番長男が戦死しております。ところが戦時中は村の区長をしたために人前では涙を見せずに、「名誉の戦死です」と言って、にこにこしながら済ましたが、戦争が一旦終わってからは、一切靖国神社も、日の丸を挙げよもとか言わなかった。郵便局の局長が「遣

族年金が出とるから取りにきてよ」と電話してきたのを、電話口で「人の倅を殺しといて取りに來いとほなにごとや！持って來い！」と言うと郵便局の局長が自転車に乗って持ってきました。その親の心情を見た時になんで小泉が靖国神社に參るのか、これは中国や朝鮮の人が怒る前に、先ず日本の国民が怒らないといけない。外国が許す、許さないの問題とは違ふ。靖国神社、天皇の為に死ぬことが良いことだという、そのシンボルになっている靖国神社が未だに東京にあること自体がおかしい。ポツダム宣言を受けた時に取り除いておかなければならなかった。（Bさん：「私は東京に行ってもお參りしないのは、皇居と靖国神社。これだけは絶対に頭を下げません。」）

だから、内政干渉以前の問題。15年戦争という歴史学者がおること自体がおかしい。50年間迷惑かけましたと田中角栄が頭を下げなければ仕様がなかった。平壤宣言でもそうである。今年、関東大震災80年だが単に朝鮮人が虐殺されたという歴史だけを残すべきではない。朝鮮人中国人6、000人を殺したのも、日本人、自警団いわゆる国家権力の手先となる。一万数千人の朝鮮人中国人を匿って助けたのも日本人 - 恩人として語り継がれる（孫の代まで語り継がれ、お礼の碑を恩人のお墓の隣に建てた）。

政治経済を見る場合も、縦と横の関係をぴちっと見て言わないと、アメリカ人でもアジアから行っているアメリカ人もいれば、ヨーロッパから来ているアメリカ人もいるし、前からいるアメリカ人もいる、それぞれの民衆を正しく見極めないと、一山なんぼのような扱いをしていると、相手につけこまれる隙を与えることになる。

### 【墨面さん】

靖国の問題が内政問題というのと同じような形で、草の根右翼の論理が、極東軍事裁判は連合軍がした事であり、自分達の問題ではないと言

う。同じ論理。日本という一つの総体があって、それに対して韓国や中国という対立構造がある。それは日本の問題であり、それこそ考えるべきであり、どうして戦犯を（自分達で）よう裁かなかったのか、今だに日本に靖国神社があり、認めているのか。

もうひとつ、口実・言い訳の中で、平和を願って靖国参拝をする、と小泉も言っている。言葉の遊びが非常に多い。草の根右翼の中でも、映画「山本五十六」や「プライド」に批判が来ると、平和を願ってこの映画を作りましたと、言う。平和を願えば何でも通るかと言えば、違う。問題は質を問う。靖国とはどういう所か。その思想は。靖国神社に祀られているので、「台湾征伐」が海外出兵の第一号同じく義勇軍（台湾人）も合祀されている。

義勇軍は同化政策・公民化政策の犠牲者。

殺した側と殺された側が両方祀られている 靖国訴訟の原因

【Bさん】

軍隊内の精神的屈辱を訴える。（慰霊施設として）アメリカ式でいいから、お箸一本でいいから、祀られている家族が参れたら良い。そうすればどこの国からも非難されない。

私が靖国神社にお参りしないのは、私が殺した日本兵が入っているから。田中真紀子が外務省の中が（伏魔殿）乱れていると言うのと同じように、靖国神社の内部も日本兵同士が喧嘩しているのです。そんな所にどうしてお参りに行けようか。私は行きません。

【Cさん】

小泉も靖国神社に行っても、手を合わせているかいはいかは別として、行ったというニュースだけが値打ちがある。靖国に毎年いつの日に行く

かを言われるが、行けば行くほど中国には行けなくなる。中曽根が一番初めに公式参拝をしたが、叩かれて途中で止めた。小泉は毎年性懲りも繰り返す。毎年繰り返すと日本の総理大臣が、(日本以外の)外国では中国の総理と話ができて、中国の土は踏まれないことを(知るべき)。来年また夜中にこそっと行っても構わないが、新聞に出てしまえば駄目だ。

【Dさん】

過去の問題としてではなく、現在の問題として捉えなければいけない。昔天皇、今ブッシュ、ブッシュの名の元に追従している。過去を今のこととして考えないと同じことのくりかえしをする。平和運動もそうでなければいけない。

【Kさん】

南京大虐殺は、兵隊がおこしたと言われるが、その兵隊を動かしたのは国家主義。今回それをテーマに講演があります。

【Bさん】

なんですって？兵隊がやった？

兵隊ではない。大元帥陛下、天皇陛下です。私達は天皇陛下のためとすることで命を投げ出すんです。若い兵隊が知覧では「お母さん、お父さん」と言いたい言葉が言えない。「天皇陛下万歳！」と顔を見たことのない者のために。人間復帰しましたよ。(当時は)直立不動ですよ。

(Kさん:日本では天皇の名前を出すのは難しい、との発言に対して) 難しいことはない。どんどん言うべきです。(Kさん:それが分かっているにもかかわらず) 何万人という日本人を、自分の身を守るために、シベリアから帰さなくていいと言ったのは誰ですか。国

体を守らんがために、天皇陛下ではないですよ。傍の者だと思います。しかし、天皇陛下は大元帥。大元帥というのは勲章をたくさん付けて立ってますが、と同じですよ、「部下がやったんや、わしや知らん」責任をとっていない。大元帥というのは東郷元帥の上です。軍人なんです。それが、「知らん、下の者がやった」宮城で結構なこととして。私は天皇陛下が憎くて言うのではない。決して。私は昔の人間だから。しかし、あまりの無知さ、責任問題を誰がとるか。シベリアから兵隊を帰さなくて良い、端の方でも使ってくれ。その代わり国体は守ってくれと、言ったのはなんなんですか。

自分が犠牲になっても それらの者を帰してくれと言うのが、赤子と我々を言っている天皇陛下ではないのですか。私は、軍隊で殴られた時に上官によく言いました。「あなた方は私らを天皇陛下の赤子だと言った。言うが正しいか、やるよりも、あなた方が私を殴るということは天皇陛下の子どもを殴っているのですよ。それでいいのか」と言うたがため、必ず第一線に送りだし、「あいつ戦死させい」「あの男は戦死だ」それが軍隊なんです。上にいて下を見ては駄目なんです。実際に第一線に行ってどうして敵と戦わずして日本兵を（絶句）

これは本当に苦しみを受けた者でなければわからない。肉体的よりも精神的与えられる苦痛が如何に耐えられないか。今日寝ていた隣の兵隊が、裏の便所で首を吊って死んでいる。これは、精神的な苦しみによって（自殺を）やっている。天皇陛下のこう言うことを言えば帰れないかも知れない、暗殺されるかも知れない。それは事実かも知れないが、言えないだけです。

### 【Aさん】

どこへ行っても「ここは政治とは関係ない」と言われるが、私たちが戦争に行く時、殺しに行く時に、「世論に惑わず、政治に関わらず」と

命令された。それが最も酷い政治が「人を殺しに行け」と。その事を考えてもらいたい。しかし、現実には兵隊を送りだし、日本軍を送り出すのも政治。自分たちが政治に関係ないと言っていると政治に協力させられる結果となる。

私たちは、少なくともその時はお国のために、やらなければいけない、大事なことだと思って行った。今も同じことがされている。石原慎太郎らが、中央の東京で大量の票をとって知事になっている。完全にイカレテイル。政治に関わらないと言って、彼らに皆協力させられている。大学の研究会では、先生方は皆そう言う。大量虐殺も、劣化ウランを撒き散らすのも、飢えた子どもたちを白血病にするのも、それに反対する者を悪の枢軸と言う。私は、少なくともそう言う加害者にならないようにする為に、あるいは被害者にならないようにする為に。しかし、現実に加害者の方に進んでいる。そのことを考えていただきたい。

### 【Bさん】

墨面さん、決して、日本国民はいろいろと検討している。ほったらかしにしているのではない。私らのように、中国に味方するのではないが、誰が悪いかを知っている。先ほどの話のように縦割り、横割りは別として、全然反省してないわけではない。我々は我々なりの反省をしていることだけは中国の方にも知っていただきたい。決して論争していないのではない。

私は、各大学に戦争と平和と言うことについて1時間くらいずつ講演に行きます。実際に私が受けたそのままの形を表すために。この前も2つ質問された。「赤紙とは一体何ですか」。それと「貴方は戦争に行かれて、必ず勝つと思って行かれたのですか」。この質問には私は参りました。中学3年の子、15～16かな、よう知ってますわ。戦争とはこういうもんなんだと、私は、ほんと弾の下をくぐって、そして部落に突入

し、そして憎さも憎し敵ではなく、日本の歩兵、その教育の仕方、そういうものに対して戦ってきた。

だから、靖国神社にはお参りしない。私は河原で戦死した兵隊を焼きました。けども、遺骨として持って帰ってきたのは全然違う。そんなものが祀られている。そこで小泉さんどういってお祈りをするのか一回聞かせて欲しいな。ほんとに平和を願うだけでも、やはり中国の方が知ってもらわなければこの問題は、いつまでたっても解決しないのではないかなと、思いますね。参るんやから、小泉さんまた当選すれば、お参りするでしょうね。こそこそ言い訳して、攻撃され、そしてまたお金を払う。一体、何をしているのかな。だから、決して見逃していないということだけは、頭の中に入れていただいて今日の私の質問は終わります。

#### 【Cさん】

日清戦争で、中国が日本に賠償金を支払ったことを日本人は知らない。わが身のことは棚に上げている。ODAのことばかり言っている。

#### 【Eさん】

国民党の寛大政策「暴力を持って云々」が勘違いされていることにびっくりした。共産党のやってきたことしか知らないの。

近藤一さんの意識が変わったことが、山西省のおばあちゃんに直接会って意識が変わったことが、正に私の母がそうであって、自分のお父さんが戦争に行き、中国で殺されたのではないが、亡くしたことに被害者意識があったのが、中国に行く度に、そうではなかったことが分かった、それが大きな「気付き」であった。「気付く」ということが一人一人が、そのことを改めて思いました。

今、「改憲」ということにあまり反対の比率がないことに、自分は不思議に思うが、全体的に賠償の問題にしても、日本人の無知に尽きると

思う。どうしたら良いのかと思うが、そのつけがきていることだけは間違いない。戦後の。

【Bさん】

日本人は、怒らない。私ら80になって、死ぬもんかこれだけ怒るんですよ。だから老入党を作ってどんどんやろうやないかと。実際に世界の戦争を知り、いろいろなことをやってきた我々がやらなければ駄目だと、なぜ、蒋介石が死んだ時に、天皇陛下が行かなかったのか。孫に言うのです。お前がいるのは蒋介石がおじいちゃんを帰してくれたからお前がおるのやと。それだけでも子どもは理解します。間違っていますか？どう思われます？中国の人だから質問したいのです。見解の相違が大いにあるだろう。

【Fさん】

結果的に、当時の日本人が帰還できたのは中国の人々が寛大であったから。蒋介石にはいろんな目論みがあったにしろ。

【Bさん】

北支では、日本軍は勝っていた。だからどうしても（日本が負けたことを）どうしても信じられなかった。だけど、武器が全部取り上げられて初めて負けたことを実感した。そして、階級章を全部とった。残れ残れ、指導者になれと、どれだけ言われたことか。中国の兵隊に銃剣の使い方を教えた。

しかし、恐らく日本兵が日本兵を殺したことはご存知ないでしょう。帰ってきてからも名簿をたよりにどれだけ追いかけてまわしたか。LSTが博多に着いた時、何人の兵隊を海に投げ込んだか。死んだか生きてか知りません。

靖国神社のことについても、中国人の率直な意見を聞きたい。国民がお詫びするだけでは済まんのかと、まだ他になにかあるのかをお聞きたい。

【Cさん】

兵庫教育大学の若い中国の留学生も過去には無関心、今の自分の研究の課題だけ。脱イデオロギーというか、日本の若い者と一緒だなと思う。過去の歴史に無関心、エリートと言われる人ほどそうである。

【Gさん】

責任追及をしないところに、草の根右翼の入る余地があった。平和運動をする人の気持ちはきれいなので(純粹) 入り込まれる余地がある。戦後、帰還兵は差別されなかったか？ 民主主義も口先だけではなかったか？

【Hさん】

本日の「横割の考え方」は非常に共感できる。

同時に、昨今の日本人の平和運動が、自分達を絶対正義に身をおいて、戦争加担者の行為をまるで他人事のように攻撃する態度も容認できない。日本人の平和運動は、自分自身の罪性を追求する態度が必要であると思う。自分達の運動を実践に繋げるためにも選挙で意志を表したい。

【Iさん】(元中帰連会員)

自分達が苦しんだ以上に中国人が苦しんだ。これは想像もできないと思う。いくら議論しても仕方のないこと。

お互いが幸福に暮らすこと、共通の願い 平和に暮らすこと、お互いが侵略しない、お互いがその生活を守っていこう、という、自分たちの

国の平和、他国の平和、全人類が平和に暮らしていこう、という所から出発するのだと思います。

中国では決して、共産主義がいいとか、社会主義がいいとか、一言も言わない。どの主義がいいとかは、その国、国にある。一番正しいのを受け入れたらいい。私らが一番先に中国で習ったのは、人間というのはどのようにして生れてきて、どのような生活をしてきたのか、そういう所から出発した。

昔から戦争は尽きない。それは自分のことだけを考えたら戦争は尽きない。お互いが助け合い手を差し伸べること。戦争が何故なくなるのか、・・・自分の事しか考えないから。全人類のことを考えて世の中を渡っていく、・・・個々にはいろいろあるが。

こんどの選挙でもみんな考え方が違って、どちらを入れるか分からないが、しかし、選挙にいかない人間よりはましである。文句は言うが、選挙にいかない人は多くいるが。

いろんな問題がまだ起っているが、お互いが助け合って、手を携えていこうという気持ちをずっと持ちつづけて欲しい。お互いを憎まないこと、人を憎まないこと、人を貶さないこと、それぞれ人はみな違うのだから。考え方も、中身も。

「自分の意見を自由に述べ合える社会を守る」

【Bさん】

「日本鬼子」の中でのことが中国で行われた。私もこんなことをしてきたんだと思う。

【Iさん】

それ以上のことをしていますよ、第一線でしたからね。向かい合っているのは国民党軍、横の方から出てくるのが新四軍。討伐に行くのは新

四軍に行く。日本は昔からそうだった。

【墨面さん】

結論を出せないが、「縦割り」と「横割り」が市民運動には否定されないが、これほど難しいことはない。

日本民衆とは、国籍ではなく、日本に住む市民。私も一部入っている。

一人の人間の中に善と悪の両方がある。

戦前は人間の持つ当然の感情を押さえ込んできた。それが、今もずっと続いている。

花岡でも、餓死寸前の人(中国人)にお握りをあげたおばあちゃんが、蜂起して捕まった人間に石を投げ殴った人達の中に混じっている。

決して良い日本人、悪い日本人という分け方をしたくない。民衆というものは、少なくとも、戦時中であつたり、ある意味では今でも加害の内にあるのは当たり前。

しかし、加害ということで切ってはいけない。それは、正に「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」の何を受け継ぐか、中国の民衆が日本の人たちに変わって欲しい、我々の敵ではなく、仲間として、そして共通の敵に対して、今で言うとイラクに行こうかとか、北朝鮮を叩こうかとか、というレベルで共通に闘える仲間になりましょうと、いう正に横の思想を作ろうとしたのだと思います。

私は、この若い人たちの会が、そういう思想を受け継いで、今後の平和運動の関わりの中で、悪い形での加害と被害を分けるのではなく、共通のものを持って、共通の敵を叩いて平和を作ろうと言う思想を継いでいっていただきたいなあと思い、私もこの会に入っています。今日はありがとうございました。

## 4 . 感想

\* 事務局メンバーの感想を以下に紹介いたします。

### ( 1 )

墨面さんの言いたかったことは、あの当時、侵略国は日本で、被侵略国は中国であるのは事実だが、日本対中国という国と国との観点を主に立てては、戦犯管理所での寛大政策は見えてこない。それぞれの国に支配者、民衆があり、彼らがどうであったかの観点をまず第一に考えなくてはならないと話された。互いの国の支配者同士、民衆同士、支配者と民衆はどういう関係を持っていたかでもある。

戦後すぐの「一億総懺悔」は日本の支配者と民衆の責任の所在を全く無くした典型である。

支配者同士の関係で言うと、国民党政権は中国侵略の総司令官・岡村寧次を無罪にし、日本に帰しただけでなく、戦後も関係を続け、今も形を変えてそうである。

日本の民衆は強制連行した中国の民衆に対しどう対応したのか。花岡等で亡くなった中国人の遺骨送還運動に対する中国、朝鮮、日本の民衆同士はどう対応したのか。国民党、日本の両政権はそれに対しどう対応したのか。支配者と民衆という観点から種々の興味深い話を聞くことができた。私たち民衆の間同士やはり仲良くしなければならない。また国と国とを超えて民衆は手を結ばなければならないと強く感じた学習会であった。

( 2 )

そう遠くない過去に日本が侵略国家であった事実から目を背けた、被害者意識のみの厭戦思想。現在の戦争には反対するが、過去の日本の戦争責任を自分の事としては考えない絶対正義の立場からの反戦思想。両者共、戦後日本の市民階層を支配した反戦イデオロギーであり、今日も尚、名もなき市民の間に脈々と受け継がれている。戦争放棄の憲法を手にし、曲がりなりにも反戦イデオロギーを醸成した市民社会がありながら、何故今日のように再び外国に軍隊を派兵する状況になったのか。

一方で、撫順・太原両戦犯管理所を経てきた元軍人達の加害証言は、聴く者の魂を揺さぶり、過去の日本の戦争責任と真摯に向かい合う姿となった。しかしこの勢力も市民社会の中では絶対多数とはなり得なかった。この「被害」「加害」の分裂した意識を統一し、その原因を追求する両者の態度こそ、今日、日本に求められるイデオロギーである。

象徴とは云え天皇制を温存し、中央から地方まで官僚に支配され、特権階級が存在する日本社会。この現状社会の分析と、旧体制の解体こそ市民社会に課せられた課題ではないだろうか。

外圧でしかこの国は変わらないと言われつづけたが、もうそのような悠長なことは言っていられない。このままでは再び世界史に汚点を残すことになるだろう。世界中の民衆と手を携えて、この国から変えていかなければならないと痛感した学習会であった。

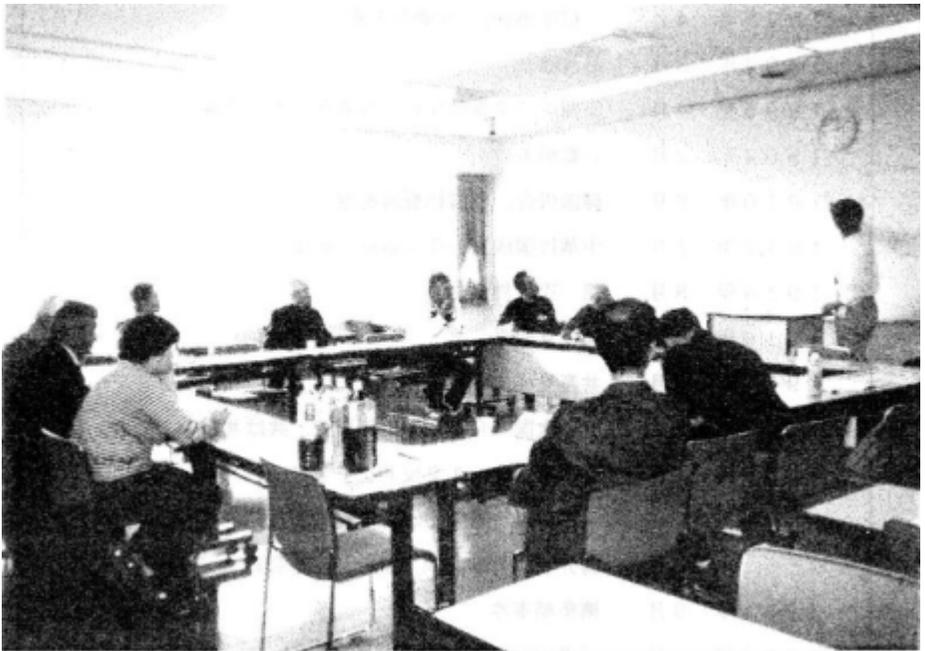
( 3 )

墨面さんが、蒋介石の「以德報怨」と中国の「寛大政策」の違いについて講演してくれることになったが、私は急用のためこの学習会に参加することができませんでした。

そんな私の「墨面さん講演」というパンフを読ませていただいた感想ですが、正直言って理解するのが難しかったというのが第一印象です。この内容を理解するためには、日本の台湾侵略とその後の台湾の実態と、蒋介石と中国民衆の関係、国民党と共産党の関係を歴史的事実を通して理解していないと、墨面さんの言わんとされることを自分の言葉として理解できないのではないかと思いました。

「被害」と「加害」を対立させてはならない。それは、国家間での敵対ではなく、支配者、言ってみれば侵略戦争を推し進め、民衆にそれを強要した支配者に抗していくことでなければならない、それが墨面さんが主張されているところの「横に割る」ことなのか。そう理解できたのは、このパンフを何回も読み返してからでした。

私は歴史的には加害者であるが、私にとっては「横に割る」こととは犠牲者の皆さんの信頼を得るようになることであると思っています。



## 5 . 参考資料

### < 国民党、共産党、日本関係の年表 >

1874年	5月	日本の台湾出兵
1878年	4月	「琉球処分」、沖縄県を置く
1894年	8月	日清戦争
1895年	4月	下関で日清講和条約、台湾等日本へ割譲
1904年	2月	日露戦争
1910年	8月	韓国併合、朝鮮総督府を置く
1912年	1月	中華民国成立、孫文臨時大統領
1914年	8月	第一次世界大戦
1919年	10月	国民党成立
1921年	7月	共産党成立
1924年	1月	第一次国共合作（国は国民党、共は共産党のこと）
1927年	4月	蒋介石、4・12反共クーデター （田中義一首相これに道義的支援）
	10月	蒋介石、日本訪問。田中首相と会談
1931年	9月	柳条湖事件
1932年	3月	「満州国」成立
1934年	3月	溥儀、皇帝
1936年	11月	日・独・伊防共協定
	12月	西安事件（張学良、楊虎城、抗日のために内戦停止を要求し、蒋介石を監禁。周恩来、西安に急行しこれを機に、再び国共合作、抗日民族統一戦線の結成）
1937年	7月	虚構橋事件

- 1937年12月 南京大虐殺
- 1940年 9月 日・独・伊三国同盟
- 1942年11月 閣議決定による中国人強制連行始まる
- 1942年10月 岡村寧次、山西省の抗日根拠地の掃蕩作戦を実施
- 12月 ルーズベルト・チャーチル・蒋介石、カイロ宣言
- 1945年 4月 米軍沖縄本島上陸
- 6月 花岡事件（秋田県）
- 8月 日本敗戦
- 蒋介石「暴力を以って、敵の暴力に報いるな」の  
共産党、戦犯名簿を公布、戦犯第一号は岡村寧次
- 8月～10月 重慶で国共（蒋介石と毛沢東）会談
- 9月 何応欽、岡村寧次から日本軍の降伏文書を受け取る
- 12月 蒋介石、岡村寧次に南京で接見
- 1946年 7月 国共内戦を再開
- 1949年 1月 南京国民政府、岡村寧次に“無罪”の判決。即刻、岡村  
寧次ら260名の戦犯を日本に送還
- 10月 中華人民共和国成立
- 秋 岡村寧次の命を受けた、旧参謀の富田直亮ら、旧日本軍  
83人台湾に。「白囚」と呼ばれる。
- 1950年 6月 朝鮮戦争
- 7月 日本人戦犯1000余名、撫順・太原の戦犯管理所へ
- 11月 中国人強制連行の慰霊祭、浅草本願寺で挙行。日本の警  
官と中華民国駐日代表団（蒋介石政権）はこれを妨害
- 1952年 4月 日本と蒋介石、台北で和平条約に調印
- 1956年 6月～7月 中国軍事法廷、撫順・太原の戦犯判決。起訴45人  
起訴免除1017人

<地图>



## 【編集メモ】

この小冊子でまとめた「学習会」、そもそもは、2003年6月28日の山口光夫さん（元中帰連会員）の『“平和の火種は絶やさない”元中帰連会員 山口光夫さんのメッセージを伝える集会』での参加者の発言が発端でした。当日、山口さんは体調をくずされ、急遽、「ビデオ」によるメッセージを伝える集会になりました。

山口光夫さんは、「平和の火種は絶やさない！」と、民族や国家を超え、人権に反するものと闘い、ひとびとが、にんげんとして生きる平和な世界のために、まさに、命をかけて活動されてきました・・・、「戦争反対、志あるもの、ひとりでも生きて火種をのこす」・・・。

この小冊子が、「平和の火種は絶やさない」ことの、なにか小さなひとつになることができれば・・・と思います。そして、「平和の火種」をこれからもつくりたいと、私たちは思います。それは、私たちにとって、それが「受け継ぐ」ことの原点であると思われるから・・・。旅立たれた山口光夫さんに誓って・・・

発行

2004年6月6日

撫順の奇蹟を受け継ぐ会 関西支部（略称 受け継ぐ関西）

代表 野津 加代子

〒533-8799 大阪市東淀川郵便局私書箱17号

メールアドレス:uketugu@kansai.emai1.ne.jp

無断転載不可

（200円）

中国帰還者連絡会の事業と精神を受け継ぐ

撫順の奇蹟を受け継ぐ会 関西支部